

専門分野のスキルアップを応援。 国内留学制度「NHOフェローシップ」。

国立病院機構では全国143病院のネットワークを活かし、研修医・専修医の方々のスキルアップを応援する「NHOフェローシップ」を用意しています。短期間で専門ジャンルの知識がしっかりと身につき、所属病院では経験できない症例などを幅広く経験できる点が魅力です。国内留学を経験された先生方の声をご紹介します。



九州医療センター 脳血管・神経内科
友田昌徳

DATA

留学先病院：静岡てんかん・神経医療センター
留学日程：2016年12月1日～2017年2月28日
留学期間：3ヶ月間

専修医の声

静岡てんかん・神経医療センター てんかん研修プログラム

脳波の読影やてんかん治療の修練だけでなく
今後のドクター人生の刺激になった3ヶ月。

2016年12月から翌年2月の3ヶ月間、NHOフェローシップを利用して静岡てんかん・神経医療センターで研修させていただきました。

研修前に期待していたことに加え、予期しない収穫もありました。前者については大きく2点、①てんかんの発作を見ることができたこと、②脳波の読影の勉強ができたことでした。その他にも、てんかん診断における問診のポイントや手術適応を決めるための検査、薬物治療についても勉強させていただきました。①については、毎週1回金曜日に発作ビデオと脳波を見て、診断を検討する勉強会に参加したり、受け持ち患者の長時間ビデオ同時記録を病棟カンファレンスで上級医と一緒に見たりする機会を得ました。また、脳波の読影については、たくさん本を読んでもつながらなかった内容が、毎週月曜日の脳波勉強会で原理から教えていただけたことで、「点が線になっていく」感覚を覚えました。

一方、今回の研修で予期せず得られたこともあります。当センターがアジア各国の留学生を受け入れていることもあり、院長回診のプレゼンテーションが英語でした。英語でプレゼンテーションをしている病院があると噂では聞いていましたが、どの先生方も当たり前のようにプレゼンテーションをこなしている姿を見て語学へのモチベーションが上がりましたし、語学に対する修練の必要性を感じました。また、皆様が留学生へ丁寧に教えていらっしゃる姿も印象的でした。

当センターでの研修はてんかんや脳波の修練だけでなく、今後の私の医者人生を突き動かす経験になりました。寺田清人先生、高橋幸利先生、井上有史先生をはじめ、教育に携わり、手を差しのべてくださった先生方、病棟や医局などのスタッフの方々、研修を許可してくださった矢坂正弘先生、フェローシップ制度を運営していただいている機構本部の皆様へ心より御礼申し上げます。

Experience ロサンゼルスVA留学記

海外留学制度を活用して 最新医療の現場を体験

アメリカの診療体制と 教育システムをじっくり 学んだ有意義な5週間

九州医療センター 循環器科
江島恵美子

平成28年度に海外留学研修の機会をいただき、ロサンゼルスにあるVA hospital (VA) にて5週間の臨床研修を行いました。過去に1週間程ボストンにある某病院の研究室や病院内を案内していただいた経験はありましたが、長期間、腰を据えて滞在し、完全に1人で研修をすることは今回が初めてでした。

私は循環器専門医であり、日常臨床では入院 (CCU、一般、外来、カテーテルインターベンション、心臓リハビリテーション) に携わっています。事前に循環器科での研修希望を連絡し、5週間すべて循環器科で研修することができました。この研修の趣旨は、日本との違いを経験する機会であったと思いますので、循環器科での治療の流れや内容に加え、医師だけでなく他職種の役割や勤務状況等も興味深いところでした。日本のように勤務時間以外には働かない、手術は手術、術後管理は別の医師というような勤務体制を想像していましたが、実際VAではわ

り日本と同様であったように思います。ただし、日本でもそれぞれの病院で勤務体制が違うように、VAの経験はアメリカの病院のひとつの例だと思っています。

医師にはAttendingとFellowがいます。日本でいうスタッフとレジデント（専修医）のようです。Fellowは全員、UCLA cardiologyの所属であり、VAはローテーション病院の1つであるようです。Fellowに関しては、これまでにこのプログラムを経験された先生方の感想と同じです。私が関わったのは1～2年目のfellowでした。私が自身が循環器1年目だった時を思い出すと、とても対等に話せる内容を知っていたとは思いません。一般的な循環器の知識を勉強し、経験を積んでいくことに精一杯だったと思いますが、彼らはそれに加え、最新の知見まで自ら勉強しており、evidence based medicineに乗っ取ったディスカッションを繰り広げています。カンファレンスはもちろん、日常のattendingとのひとこまもとても勉強になりました。国民性もあるのでしょうか。

また、そのような場面ではattendingも基本的なところから丁寧に教えてくれます。私の経験では研修医や専修医の頃には「勉強してから出直してこい」と言われることもあり、指導する立場になってからは、自ら同じようなことを言うこともあります。また、反省すべき点であったと思います。

アメリカのfellowと違い、貪欲さのない自分にも問題があったのだということも気づかされました。国立病院機構には多数の研修医や専修医が所属しており、研修病院であることも忘れてはなりません。アメリカのfellowと違い、貪欲でない研修医や専修医にも問題はあると思いますが、指導する立場として、突き放すことなく丁寧に心がけるようにしようと思いました。

とはいっても、fellowもまだ未熟な医師です。この研修ではfellowと行動することが多かったです。Attendingはそれ個人の部屋を持っていますが、fellowは机の並んだ1部屋で過ごします。そこでカルテを書いたり、勉強したり、患者さんについて相談し合ったり、愚痴を言ったり、世間話をしたり。毎週ウェブカンファを聞きながらのランチの時間もありましたが、時に聞かずにはいられませんでした。ある意味とても有意義な時間を過ごすことができました。

この研修には特に決まったプログラムはありません。初日に病院エントランスのセキュリティ突破方法を教えてもらい、循環器科へ案内され、翌日から最終日まで自分次第です。言って後悔することもありますが、言わない後悔の方が本当の後悔になります。私は普段自分からもの申す性格ではないので、何度も勇気を使いましたが、おかげでさまざまな経験と研修をすることができました。



また、アメリカ生活も楽しみのひとつでした。今回参加した期間は私1人ではありましたが、ロサンゼルスは大好きな都市であり、何度も訪れたことがあったので不安はありませんでした。滞在するエリアはわりと安全であり、スーパー・マーケットや食事をするところも徒歩圏内にたくさんあるとうかがっていたからです。実際そうでした。ロサンゼルスには日本人（日系人）も多く住んでいるため、日本のスーパー、レストランもあり、万が一アメリカの生活に合わない人でも心配ないと思います。私が研修した期間はちょうどholiday seasonだったので、その雰囲気も味わうことができました。休日はサンディエゴまで車で行ったり、パラエ、ミュージカルを楽しんだりしました。

海外研修の機会をいただいた国立病院機構、現地でお世話になったVAのスタッフの方々、不在中に代医を務めていただいた循環器科のスタッフの方々に感謝申し上げます。